

最後の突撃隊

を率ひて外壕に達し、突撃を實施せんとするや、掛聲をなし續て進軍喇叭を吹奏す、其光景實に壯烈にして又描が如く、敵の内壕に肉薄して爆薬を放擲し敵を驅逐せんとしたるに、敵の機關砲は尙威力を振つて我突撃隊の將校以下に多大の損傷を蒙らしめ、岩本大尉の奮進も其効を奏すること能はず、遂に同隊も亦他の諸部隊と同じく胸壁の一部に伏姿して、機の至るを待つ所の止むを得ざるに至れり、

司令官穹室に入る。六時四十分司令官は突撃隊の行動を漸しどや思けん、最後の決心を實行せんが爲め、幕僚を率ひて第四歩兵陣地より自ら穹室内に入る、此時豫備隊の殘部二個中隊も亦穹室に入りて司令官の命を俟てり、此時に於ける各方面の突撃隊情況を見るに、青木聯隊及石原聯隊の一部は即ち爆破と共に突撃したる各隊は、多大の死傷を生じて左方の胸壁を占領し又内壕に突入したる

百七十

各決死隊は一部損傷したるも、健全者は内部に在りて或部分を占領し、豫備隊の二個中隊は胸壁の右の部分に占領し、又胸壁上に据附けたる機關砲三門山砲一門は、敵の内部に向つて射撃を集注しつゝ午後八時過ぎに及びたり、

最後の突撃隊

百三十餘名の決死隊 午後九時敵は尙頑強に抵抗する模様なるも、司令官は最早や敵勢の大に挫けたるを察し、豫備隊の殘部より百三十餘名の決死者を選抜し、畑田、高井、松田の三少尉及永井、永田の二特務曹長を各小隊長となし、逐次敵壘の内部に突撃せしめたるが、壯烈敢爲の決死隊は此最後の突撃を以て奏功を期せんとして、銃剣を掲げ決然突入したるの狀は、其壯烈余が筆の盡す能はざるを恨む、

司令官胸壁に登る 午後十一時に及び未だ全く我占領に歸せず突撃隊の大部分は胸壁に伏姿して深

く内部に薄らす、依然敵情を觀望しつゝあり、是に於て司令官は穹室内を出て齋藤大佐、桑田大尉等の幕僚を率ひ、胸壁に登り自ら其半身を露出して敵狀を偵察し、以て各突撃隊長に指示し突撃の機既に熟したるを告げ、大舉して進撃せしめんとし、先づ試みに斥候を放つて偵察せしむ、此偵察兵は先に突入したる決死兵と共に咽喉部まで偵察したるが、此時青木聯隊の森田中尉の率ゆる一個中隊も亦突進し、共に咽喉部にありたる敗殘兵を撃滅し、茲に全く北砲臺全部を占領するを得たり、歡聲山谷に震撼す 北砲臺は旅順攻圍軍の左縱隊が千辛万苦全力を盡して奪取を努め、右の如き慘憺たる光景の間に漸く其目的を達するを得たるを以て、直ちに應急の防禦工事を施さしめ、之が完成を待ち、司令官は夜半十九日午前零時幕僚を隨へて砲臺内に入り 陛下の萬歳を唱ふ、我攻撃隊は之れに和して一齊に萬歳を唱呼す、其聲山谷に

穹室内の砲戰

百七十一

震撼す、之を傳へたる我全線の攻撃隊は又一齊に萬歳を唱へ、其歡聲四面に轟き聞くものをして壯絶快絶の情に堪へざらしめたり、

穹室内の砲戰

山砲の備附 北砲臺の外岸側傍穹室は左(西南)に延長して咽喉部に達し居りたるを以て、今回の攻撃開始前には未だ其全部を占領し居らざりしを以て、正面よりは砲臺奪取の突撃をなすと共に、一方には穹室の殘部を占領せんが爲め、穹室内に警備隊を設け、時機を見て占領せんとせり、午後一時十五分向井砲兵中尉の率ゆる山砲一門は、非常口にわつて化物屋敷(北砲臺とQ堡壘との間に掩蓋を設けたる堡壘様の所より通稱化物屋敷と云)及穹室と兵舎と連絡せる交通路に堆積する土莖を砲撃し之を破壊したるを以て、穹室内警備隊は二時二十分より工兵をして一名づつ潜行して、未だ占領に歸せざる殘部穹室内の敵の構築したる胸壁

占領の効果

百七十二

下に至り、携帶せる爆薬を投せしめ以つて敵を撃退して該胸壁を占領せり、
化物屋敷の砲撃 依つて山砲は専ら化物屋敷を砲撃して、歩兵の突撃を援助したるが、敵は約五十米突の穹窿入口に小口径砲を敷置し、穹窿内の我警備隊に向つて發砲し數多の死傷を生ずるに至れり、是に於て午後四時二十分石原聯隊の第十中隊より、下士以下十一名を増加して専ら敵の攻撃に備へたり、五時三十分に至り警備隊は硝煙の爲め昏睡するものありたるを以て、更に石原聯隊の第五中隊下士以下二十一名を増加し、午後八時三十分になり再び戦闘を繼續したるも其目的を達すること能はず、更に青木聯隊の下士以下十一名を増加し午後十一時四十分更に突撃して漸く穹窿全部を占領したり、

占領の効果

北砲臺占領の効果は謂ふまでもなく、要塞に致命

千六百枚、角材百二十、小銃百六十一等なり、
二名の俘虜 一名は占領の當時俘虜としたるものなるが、彼は爆發の際空中に吹飛ばされて墜落したるものなれば、打撲傷を受け自由叫はず、我軍の爲めに捕はれたり、又一人は爆發の爲め掩蓋部の木材に狭まり、我軍の突進するや大聲を發して救助を求め決して日本軍に抵抗せずと叫び居りたれば、直ちに之を救ひ出さんと思へども、土砂の堆積によりて急に掘出すと能はず、翌日に至りて木材を取除きたりしが是又打撲傷を蒙り居りて、二人とも第二野戦病院に収容し生命には別條なし、感狀を附與さる 此占領の報に接したる軍司令部及滿洲軍總司令部は其勇敢なる動作により奏功し

第二 二龍山砲臺占領戰

大爆發、大砲撃

二龍山砲臺占領戰の衝に當りたるは、軍の中央縱

二龍山砲臺占領戰

たるを賞し、青木聯隊、石原聯隊、權藤隊、塩田隊、工兵河瀬隊、機關砲岩谷隊、深草支隊の岩本隊及一個人として權藤少佐岩本大尉に對し兩司令官より感狀を附與されたり、滿洲軍總司令官の感狀全文を得たれば左に
右諸部隊は第十一師團長飯島中將の指揮に隨ひ十二月十八日東 冠山北砲臺の胸壁爆破と同時に突撃を行ひ、奮戦格闘最後に師團長の自ら率ゆる豫備隊の突進に依り、遂に頑強の敵を撃退し確實に同砲臺を占領し得たるは、最も勇敢なる動作にして其功著大なりと認む依て感狀を附與す、

隊右翼隊の福谷聯隊及山田聯隊にして攻撃十五時間に亘り、遂に旅順要塞本防禦線中最も堅牢なり

百七十三

と稱せられたる、二龍山砲臺全部を占領するに至りたり、余は當時之を觀戦し、且つ占領後の同砲臺に登りて視察したれば以下順次叙説する所あるべし、

大爆發の光景 前日左翼隊參謀諸氏は十二月廿八日午前十時を期し、二龍山砲臺は大爆發をなし夫れと同時に歩兵の突撃をなす筈なりと報せられぬ而して特に中央縱隊參謀部に向つて我々の爲め觀戰地を斡旋さるべく依頼せられぬ、是に於て余等は同友兩三氏と共に同日前九時宿舎を出で、道を團山子に取り鐵道橋を潜り掬家屯に出で、行程約一里にして左縱隊の西山聯隊本部の在る所に至る、時に西方二龍山方面にて大音響の間ゆると共に、我行路の前面を遮る山嶺に當つて微かに黒煙の揚るを見る、直ちに同聯隊本部の設けたる展望所に登りたるに、果せる哉大爆發は行はれたる後にてありき、一里の道を疾行して此處に至る、此

大爆發を見んが爲なり、然るに遂に後の祭實に遺憾千萬、併し該展望所にありし諸氏は爆發の模様を語つて曰く、其一刹那に於る壯觀は幾度か見るも人をして快哉を叫ばしむるも、北砲臺爆發の光景と更に異なる所なく、唯左側二三秒時間早く右側引續て爆發したるのみ、而して風劇しさが爲め爆煙暫し山嶺を這ひ中空に横はり、蛟龍雲霧を得て天に翔るが如く、地に蟠まるが如くなりしは、絶大の偉觀なりしと、

砲臺の眞最中 余等が展望所に登りたる時は砲撃の集注しつゝある時にて、前面及右側の谷地には我榴彈砲の巨砲は据附けられ、尙背後及左側方面にも重砲陣地ありて、代るく二龍山の敵陣地に向つて砲火を送り、其他二龍山正面及び右縱隊方面よりも同様友軍の援護射撃は集注せられぬ、是に於てか敵も亦頻に我歩兵突撃隊陣地に砲火を浴せ掛けると同時に、我砲兵陣地に向ても、巨彈

を送り來り、余輩觀戰者の頭上を幾度となく通過して肝膽を寒らしめたり、此間に於て勇敢なる我歩兵突撃隊は、斜堤の陣地より外壕に出で、胸壁の爆破口より日章旗を振つ胸壁上に攀登するを見たり、其一瞬間に敵か味方か判然せざるも、砲彈の爲め硝煙の揚ると共に空中に吹き飛ばさるゝあり、又木材の如きもの飛散するありて實に其光景は余が禿筆の盡くし能はざる所なり、余等は此處に觀戰すること約三十分間にして、更に前進して觀戰せんことを企て、山を下り前方を迂回せる鐵道橋下を過ぎて、我巨砲の据附けられたる陣地の傍に到れり、

巨砲飛行を見る 此時恰も我陣地より二十八瓏知の巨砲は發射せられ、其音響は余が鼓膜を破らん斗りに響き、後送りしながらも空中を仰ぎ見たるに、巨砲の空中を飛行するの狀余が肉眼に映じたり、更に落下するの狀を見んと瞬したる間に巨

彈の行衛を見失ひたれば、余は更に其模様を見んと耳を抑へて再び巨砲の發射を熟視しつゝありしに、間もなく指揮官の合圖と共に發射せられたり、硝煙は螺狀をなして巨砲を送り、螺狀の白煙中より現出したる刹那の彈丸は、頗る大にして兩眼に映じ次第に空中に入るに從て蟻程の形狀となり、其最高到着點に達して落下するや同一微小なる形狀は余が双眼を離れず、山陰に入りたるやと思ふ間もなく、ドーンと響は耳朶に達し敵陣地に爆裂したるを覺しめなき、蓋し此巨砲の重量は六十貫目及び其着弾距離は二萬米突に達すといふ、如何に此巨砲が敵に大損害を與へて其威力を逞くたるかは、之を以ても想像し得らるべし、斯くて余等は敵砲の發射を見つゝありしが、敵も亦我に劣らざる大口徑の巨砲を送り來りて、陣地の近傍に落下すること兩三回、土砂は高く揚り岩石を破壊して飛散せしめたる勢力の猛烈なりしことは、再

ひ余をして戰慄せしめたり、併しながら余等は尙
は此陣地を過ぎて前方に出で觀戰せんとしたるに
下士某は余等を止むるに危険甚だしきを以てし、
且つ少時前に饅頭賣の支那人は敵彈の爲め負傷し
たりと物語る、是に於て余等は止むなく中央縱隊
司令部に至り觀戰の好地點なきやを尋ねんとした
るに、幹部は某展望所に前進し堀少尉のみありし
が、二龍山觀戰に好位置なく司令部の展望所も亦
狹隘にして側面展望の外なす能はず、且つ余等が
進みたる砲兵陣地より前方へは危険なるにより非
戰鬥員を入るべからずと、參謀部の命令なれば司
令部西方の高地より見るの外好地點なしと、彼是
する間に正午に及び、最早や觀戰の機を失ひたる
を以て、歸途に就き迂迴して大孤山麓に出たり、

大孤山上の觀戰

再び觀戰す 余は大孤山麓に於て同行の諸氏に別
れ、再び觀戰せんが爲め同山に登る、山路峻険に

して岩角突兀攀登容易ならず、余は喘ぎ／＼て漸
く山巔に達したるに、敵島中將は幕僚を率ひて觀
戰しつゝありし、余は砲兵觀測所の銃眼より朝久
野少佐の望遠鏡を借り、二龍山方面を觀望したる
に、大孤山は高く群山を抜きて峙ちたるを以て、
敵の要塞全線は殆んど双眸に收まり、二龍山の側
背を眼前に見るを得たり、少佐は余に指示して曰
く、二龍山砲臺は胸壁上に輕砲線あり、内庭を隔
てゝ更に重砲線ありて、構造北砲臺とは其趣を異
にするが如し、而して輕砲線は爆破と共に歩兵の
突撃によりて占領し得たるも、敵は重砲線により
て頑強に抵抗し居るものゝ如く、其後の戰況は未
だ發展するに至らずと、時に午後三時、折柄敵島
中將は特に設けられたる展望所を出で余が覗きつ
ゝある銃眼の傍に來り、半身を露はし敵壘を觀望
せらる、余は其危険なるを憂ひつゝ在しに、將軍
は平然として起立すること霎時、余に語つて曰く、

敵は爆破と共に逃走したるものは二三名の外見る
を得ざりし、我兵胸壁上に輕砲線を占領するや
三四名の露兵は重砲線によりて頻りに爆藥を投ず
るを見たり、然れども此勇敢なる敵兵も亦忽ち其
位置を保ち得ずして死傷したるが如く、砲臺内に
ある敵の數も亦多からざるが如し、而して敵は未
だ増援隊を送り來らず、思ふに我砲擊の效果によ
りて救護の道なきに依るなるべし、此有様にては
程なく重砲線も占領するを得べしと、此時我突撃
隊は蟻の甘味につくが如く胸壁上に登りて砲臺内に
突撃せんとするが如き光景にて、暫時現狀維持の
姿となれり、是に於て余は眼を轉じて西南方を展
望するに、正面高地堡壘の間より白聖赤煉の屋舎
巍峨として見ゆるあり、是れ即ち旅順舊市街なり
其前方黄金山白玉山を経て左側海岸に沿たる所に
高樓大廈の見ゆるあり、是れ即ち新市街なり、又
港内に驅逐艦一隻坐礁し外に二三沈没艦の楫柱波

大孤山上の觀戰

間に漂ふが如きを見る、更に眼眸を洋上に放てば
我軍艦數隻は黒烟を吐きつゝ嚴然として港口を封
鎖しつゝあるものゝ如し、時に傳令報じて曰く、
我軍は四時を期して重砲線に向つて突撃を實行す
る筈なりと、
砲火再び猛烈 四時前二十分頃より友軍の砲擊は
再び猛烈に開始せられ、着弾正確にして白烟黄土
の飛散する狀は實にパノラマを見るが如し、敵も
亦砲火を以て我に酬ひ應戦甚だ努む、此時觀測砲
兵の曰く、此正面に於ける敵彈今朝より二百發以
上に及ぶと、然れども我砲兵陣地は損害を蒙むるこ
となく、十分二龍山砲臺内に巨彈を集注し其成果
の大に著はるゝと共に、歩兵突撃隊の蟻の如く胸
壁に在りたる部隊一時に吶喊したり、是に於て我
砲兵は更に敵の砲兵陣地及砲臺咽喉部に砲火は集
注したるが、突撃前より爰に至る間の光景は、實に
壯烈悲愴と謂はんか將た雄渾偉大と謂はんか、繪

書の名手も亦此活劇を實寫すること能はざるべく思はれたり、時に軍司令部より電話を以て報じて曰く、只今重砲線を確實に占領したりと、時計を見れば四時を過ぐること二十七分、

將軍の明言 余は重砲線占領を聞き、尙ほ暫し観戦しつゝありしが、日漸く傾き寒威頗る加はりたるを以て、將軍の展望所に入り謝辭を述べて去らんとしたるに、將軍の曰く、敵の敗殘兵は尙咽喉部にありて抵抗するが如くなるも、速からず驅逐し得べし、併し午前中よりの戦況を観察するに我軍も随分苦戦したる模様なれば、死傷若干に達したるべし、而して北砲臺は陥落し二龍山も亦斯の如し、敵の士氣は阻喪して恢復す可らざるに反して、我軍の士氣は益々旺盛にして敵と逆比例をなしつつあれば、今後何れを攻撃するも其目的を達せざるることなし、片端から一つ宛砲臺を破壊し行くも旅順の陥落は既に眼前に迫りたるにわらずや

と、余は此壯快なる談話に耳朶を洗ひつゝ辭して山を下りたり、

戦闘本記

爆發作業の状況 二龍山攻撃観戦記の状況を記載し了りたるを以て、是より更に戦闘本記に移らんと欲す、抑も二龍山砲臺は東鶏冠山北砲臺及び松樹山砲臺と共に、我攻撃正面に於ける永久堡壘にして、數回の我強襲は其効を奏せず、十一月廿六日の總攻撃、後正攻法を以て着々坑穴を穿ち爆發の準備をなしたり、之れが監督者は杉山工兵大尉にして、藤村工兵大尉専ら部下を指揮して作業に従事し、正面胸牆の右側に二個、中央に一個、左側に二個の坑穴を穿たしめ、其坑穴内に拾貳個の薬室を設け爆薬を装填し、十二月廿八日午前十時を期して爆發を實行する場合に至れり、突撃隊の部署 工兵隊の工事進捗と共に、歩兵突撃隊も亦夫れく部署を定めたり、即ち是れが攻

撃の任に當りたるは中央縦隊右翼隊にして、平佐少尉之れが指揮官たり、而して山田聯隊(中佐山田良水)は左翼となり福谷聯隊(中佐福谷幹雄)は右翼となり、各二個大隊を以て突撃隊となし、福谷聯隊は爆破と共に右側の爆破口より、山田聯隊は中央及左側の爆破口より突撃することに定め、更に山田聯隊に於ては藤岡少佐を突撃隊長となし該聯隊特別選抜兵九十名を近藤特務曹長頼綱軍曹の指揮下に屬して最前線に出し、更に加納大尉を第一線部隊長として二個中隊を率ゐしめ、更に一個中隊を作業隊として各豫定の陣地に就かしむ、又福谷聯隊に於ては田中少佐を突撃隊長となし、更に堀江中尉を第一線部隊長とし百三十名の特別選抜兵を最前線に出し、尙山田聯隊と同じく援護隊及作業隊を部署し、其陣地に就き爆破の效果如何を待ち構へたり、

戦闘本記

大爆發は起り、砲臺正面の胸牆は殆んど破壊し盡され、其効果極めて良好なりしも、爆破の餘勢思はぬ所まで波及し、我第一線部隊の突撃進出口を塞ぎて且つ少なからぬ損害を來し、福谷聯隊の第一線部隊長堀江中尉は奮進最前線に出で、爆發の起るを待ちつゝありし爲め、満身土砂を浴び爆破の石片にて重傷を負ひ後方に下りて遂に絶命するの不幸に遇へり、又同中尉の率ひたる特別選抜兵百三十名の過半は掩蓋下に埋めらるゝの慘狀を呈したり、加之ならず福谷中佐も亦腕と膝と頸と三個所に輕傷したるが、山田聯隊にては爆發の爲め損傷はなかりしが如し、

輕砲線の突撃 爆破の結果は前記の如く我に多少の損害を來したるも砲臺の胸牆を破壊し、第一防禦陣地たる輕砲線を覆へしたれば、多數の敵は其土砂の爲めに生理めとなり、生存したるものは第二の重砲線に退却せり、是に於て我突撃隊は豫定

大爆發の效果 豫定時間を過ぐること七分にして

の如く爆煙の揚ると共に、各其陣地より外壕に出で破塙口より突撃をなす筈なりしも、前記の如く進出口を塞ぎたる爲め少數のものゝ外出づること能はず、土砂を除去するに多少の時間を要したり、是を以て山田聯隊にては特別選抜隊長近藤頼綱の二人先づ部下を率ひて中央及左側の破塙口より日章旗を翻しつゝ突撃せしも、後援部隊を注入すること容易ならざりし爲め非常の苦戦に陥りしが、間もなく第九中隊の小澤少尉第十中隊の友田少尉各其部下を率ひて突撃したり、而して此時に於ける福谷聯隊の情況如何を觀みるに、前記の如く爆破の際多大の損害を蒙り、第一線部隊長重傷を負ひ、選抜隊の過半は生理めとなりたるを以て、隊伍大に混亂したるが、選抜兵の殘部は村田軍曹之を指揮して右側の破塙口に突撃し、續て安藝大尉の率ゆる第二中隊白石大尉の率ゆる第四中隊之れに増加す、十時三十分頃兩翼突撃隊は遂に輕砲線

を占領し、直ちに土工をなし土囊を運びて、防禦及攻撃陣地の形成を努めたり、茲に最も痛惜に堪へざるは、山田聯隊の藤岡少佐なり、少佐は平生用意周到にして計畫適切なれば、上下望を囑し、山田隊長は特に少佐を以て突撃隊長となし計畫せしむる所あり、初め突撃隊が破塙口に突撃するや、右方福谷聯隊の突撃部隊は未だ進出せず、後援隊も亦容易に續かず苦戦に陥りつゝわりし際、少佐は部下を督勵して之を救援せしめん、號令叱咤の一刻那、敵彈頭部を貫通したるを以て直ちに後方に下り、應急手當をなしたるが間もなく絶命したるは惜みても尙餘りあることなりき、

敵火の集注 第二防禦線たる重砲線に退却したる敵兵は、頑強なる抵抗をなし、左右兩側の胸壁に據りて小銃爆薬を射擲して我突撃隊の進入を防ぎ加之ならず敵の側背にある各砲臺より我陣地向

つて砲火を集注したり、即ち右翼福谷聯隊方面に對しては、松樹山砲臺同補備砲臺及南方高地砲臺椅子山案子山砲臺より頻りに重砲を發射し、又左翼山田聯隊方面に對しては、望臺盤龍山新砲臺砲臺等より砲火を送り、尙舊支那圍壁よりは盛んに小銃火を送り來りて、砲臺内は爲に煙を以て蔽はるゝに至れり、而て敵は尙重砲線兩側より機關砲を發射して勢甚だ猖獗を極む、特に右翼福谷聯隊に對する敵の砲火は最も猛烈なりしかば、損害も亦從て多く、之れが爲め占領したる輕砲線に伏奏したるのみにて、一歩も活動する餘地を得ざりき、

山田聯隊の苦心 福谷聯隊は以上の如く慘憺たる境遇に陥りしを以て、戦局の發展を計るは一に山田聯隊の双肩に掛りたる折柄、突撃隊長藤岡少佐戦死し第一線部隊の將校多くは負傷し、川瀬小澤の兩少尉殘餘の部隊を勵して戰闘に従事せしめ、

兩少尉は代るゝ先頭に立ては諸兵を指揮し、退きては後方傳令の任務を完ふしたるが、部下益々残り少くなりたるを以て、大場大尉の引率する第七中隊の増加を得て、敵と相對峙し應戰するに至れり、時に午前十一時頃なりき、然るに此時重砲線に於ける敵情不明にして、突撃隊をして浸入せしむるも其成果如何を危ぶみ、先づ立川少尉をして進んで敵情を偵察せしめたり、同少尉の報告は有利なりしも、之を以て直ちに突撃を實施すること能はず、更に加藤大尉をして敵情を偵察せしめたり、大尉は數回の戰闘に従ひて偉功を奏し勇敢剛毅を以て知られたれば、進んで重砲線に近づき、内部の狀況を偵察し報じて曰く、敵の殘兵は其數多からず、然れども重砲線の兩側に機關砲を備へ盛に掃射するを以て、之を撲滅して後突撃すれば其占領も亦易々たるのみと、是に於て更に午後四時を期し重砲線に向つて突撃開始の計畫を立つ

るに至れり、此時福谷聯隊の田中少佐は命令を部下に傳へんとせし一刹那、敵の砲彈落下して少佐を初め武久中尉村上特務曹長從卒二名は無慘なる最後を遂げたり、

砲臺の奪略

重砲線の占領 午後三時過に及び我友軍の砲撃は再び猛烈となり、且つ金山砲兵大尉は山砲を輕砲線に引上げ、重砲線兩側に向つて砲撃を開始したり、元來砲撃なるものは敵陣地を去ること一千里突の所を以て最近距離となり、其れより前進すれば必ず敵兵の爲め失敗を執るものなるも、今回の攻撃に於ては奏功の目的十分なりしを以て、此非常手段を行ふに至りたるが、豫期の如く敵の機關砲を撲滅し且つ我友軍の各砲撃は其功果著大なりしを以て、正四時に至るや各突撃隊は重砲線に向つて突撃を試みたり、山田聯隊にては第一線部隊長加納大尉部下を率ひて突撃し、福谷聯隊にては

残り少なき第一突撃隊に岡田大尉の率ゆる第七中隊を加へて突撃したるに、敵は尙盛に爆薬を放擲し砲彈を集注したるが、我勇敢なる突撃隊は鐵火の内に飛び込み、四時三十分頃には重砲線及兩側胸壁の敵を驅逐して、全く之を占領したり、然れども我軍の死傷最も多大なりしを以て、山田聯隊は辻少佐の率ゆる第八中隊及第五中隊の一部隊を増加して、重砲線の占領を確實ならしめたり、此時重砲線上の我兵は一齊に萬歳を唱へ、又輕砲線上には山田隊長軍旗を擁し、喇叭を吹奏して聲援をなす、是に於てか歡聲四方に起り士氣益旺盛となり、而して茲に最も殘念なるは、重砲線を占領し先頭に立ちて指揮されつゝありし、第一線部隊長加納大尉は敵彈腹部に命中して壯烈なる最後を遂ぐるに至りし事、又馬場特務曹長は加納大尉の部下にありて勇敢に働さしが、大尉と同時に胸部を負傷し後方に下がる時元氣旺盛大に諸兵を奮興

せしめたりき、
咽喉部の占領 頑強なる敵は、第一、第二の防禦線を奪取せられ乍ら、尙敗殘の兵を以て咽喉部に據りて抵抗しつゝありしが、山田隊長は輕砲線に部隊の整頓をなし、辻少佐より前方敵情の報告を待ちたるに、少佐は報じて曰く五六十名の敵兵咽喉部にありて四方より亂射するも、選抜隊を得て突撃すれば直ちに撃退するを得べしと、是に於て選抜突撃兵の殘部に高村少尉の率ゆる第五中隊の二個小隊を加へて、咽喉部に突撃せしめたり、時に六時二十五分、敵は非常に猖獗して西南及東南方面に潰走し、咽喉部は全く山田聯隊を以て占領するを得たり、福谷聯隊に於ては七時三十分長屋少尉の率ゆる第八中隊を咽喉部に向はしめ更に白井大尉の率ゆる部隊と共に咽喉部の第二線に據れる敵に向つて、射撃を集注して咽喉部の占領を確實ならしめたり、

砲臺の奪略

兵舎内の敗殘兵 山田聯隊に於ては咽喉部占領當時突撃隊の將校は皆死傷し、吉田軍曹殘兵を指揮して占領工事をなし、敵の襲撃を防ぎ翌午前二時頃まで勇敢機敏の働きをなしたり、而して敵は既に咽喉部をも失ひたるが、尙其敗殘兵は兵舎の室内にありて我に抵抗せんとす、依つて之を盡殺し盡さんとすれども、堅牢なるベトン製の地中暗黒の兵舎なれば、徒らに密室内に突入するは危険計るべからざるを以て、之を破壊して敵兵を驅逐せんとしたるに、敵は翌廿九日午前三時頃、兵舎の器具寢臺等に石油を注ぎ火を點じて逼置したれば爰に全く二龍山砲臺は我有に歸したり、而して輕砲線下の兵舎内に三名の敵兵ありしも、廿九日午前八時頃遂に降伏したり、内一名は下士にして二名は兵卒なりき、
敵の兵力と鹵獲品 俘虜の言に依れば二龍山砲臺を守備したるは、東部シベリヤ狙撃歩兵第廿六聯

るに難なく之を占領し、敵は殆んど抵抗力なきが如くなるを以て、直ちにエツチ高地及盤龍山新砲臺に向つて突撃を試み、之れ又及に血塗らずして奪略するを得たり、

望臺の苦戦 是より先き左縦隊の前田地區隊に於ては、中央縦隊の圍壁破壊と其行動を共にし一戸堡壘前全に於ける圍壁を占領し、翌明治三十八年元旦を以て望臺攻撃をなさんと企畫し、天明と共に中央縦隊の戦況如何を見るに、既に盤龍山新砲臺及エツチ砲臺上には日章旗高く掲げられ、我軍蟻の如く集合せり、是に於てか攻撃隊は其後れを取りたるを覺り三杉聯隊(元西山聯隊)は松田少佐を突撃隊長となし、圍壁を越えて望臺に向はしめ、午前九時十分其一部隊を以て突撃せしめたるに、敵の抵抗最も甚しく爆薬を投じ小銃を發射したるも、我勇敢なる突撃隊は躍進又躍進其の中腹を占領したり、然るに敵は尙頂上にありて頑強に防禦

す、蓋し此望臺は要塞本防線線中最高地にして、同山に登れば旅順は舊新市街とも双眸に收まり、且敵の内防防禦地は曝露せらるゝを以て最後の抵抗を試みたるならむ、我軍は此望臺占領は僅かに旅順致命傷たるを知り、午後二時友軍の重砲を此處に集注せしめ、爆煙全砲臺を蔽ふに至れり、前田少將は午後三時砲火の効力著はれたるを期し突撃を實行せしめたり、突撃は奮然猛進絶頂の敵と爆薬戦をなすこと霎時、敵遂に力盡き午後三時四十五分を以て全く我有に歸したり、敵は守を失ふに際し轟然一發地雷を爆發して退却したるが、我軍は之れが爲め何等の損傷を受くることなく敵を驅逐したり、

東鷄冠山占領

望臺を占領するや、我軍の士氣益旺盛となり、直ちに旅順口内に突撃するも必ず効を奏すべきを信じ、目出度新年も旅順陥落を祝賀するに加かずと

なし、二日未明を期し左縦隊の各地區隊は攻撃の用意をなし、石原聯隊の權藤少佐は部下を率ひて北砲臺よりキユー砲臺(所謂吉永砲臺)の側背攻撃をなし、庄田少佐は其正面に向ひ一齊に突進すべく計畫したるに、夜半十二時過ぎ東鷄冠山に於いて大爆發は起りぬ、我軍は何事にやと不審を起し直ちに強行偵察をなさしめたるに、東鷄冠山の絶頂に築造せられたる堅牢のペトン砲臺を敵自

ら爆發して退却したるものなりしを知り得たり、依つて直ちに各攻撃隊は其前面に當る敵壘に向つて突撃をなし、些の抵抗を受くることなく望臺より東鷄冠山砲臺に至る間のキユー砲臺、エムエチ砲臺(富士形砲臺)一帶の地を占領するに至り、將に旅順口内に突撃を試みんとする一刹那、休戦の命は下れり、腕を扼し拳を堅めたる勇士の落膽何ぞ是れに過んや、

第二 陥落當日の光景

休戦命令下る 余は二日早朝休戦の命ありたるを聞き、午前十時宿舍を出で司令部に到る、晝夜の別なく一瞬の間断なく彼我の銃砲聲を聞きたる天地も今や間として小銃一發の音だに聞えず、愈々敵軍は望臺奪取を最後の戦闘として白旗を掲げたるものなるを知り、道を急ぎて進みたるに、昨日までは躊躇伏姿して昇降せし前面の各高地には

陥落當日の光景

恰も蟻の集るが如く行交ふ人は不言の間に暗きとして歡びの顔色を呈しつゝあるもの、唯に新年祝賀の喜びに止まらざるを知る、余等は漸く進んで東鷄冠山砲臺一帶の高地を正面に見る、各砲臺ども日章旗は昇る旭日に映射して翻騰たり、余等は此壯觀を望みつゝ司令部に入りたるに、幹部諸氏は何れも破顔一笑手の舞ひ足の踏む所を知らざ

るが如し、余等は將軍閣下を始め幕僚諸氏に新年
 と陥落との祝賀を陳べ、參謀桑田砲兵大尉の登山
 するに随つて、先づ東鷄冠山に登りたり、
 東鷄冠山に登る 勇士の生命と頼みたる電光形曲
 折の行通路も、今となりては不用に屬し、登山者
 をして攀登の妨害を嘲たしめたり、余等は山腹に
 出で、直行邁進我散兵壕を越へ、敵の散兵壕を渡
 りて漸く砲臺に近づかんとするや、彈片丸子は基
 布して石塊と相并び、轉た激戦の跡を憶はしめに
 き、砲臺のペトンは昨夜敵の退却するとき破壊し
 て粉碎微塵となり、大口徑砲は其下に埋まりて半
 身を露出するもの、二門其の他小口徑砲の破壊せ
 るもの數門あり、背面僅かに凹地を隔て、砲臺わ
 り、(?)十珊知加農砲二門臺上に露出して我軍の
 好下物となり、余等は絶頂より旅順口を展望す
 るに港灣市街は眼下に集まり、白堊黄煉の大廈相
 櫛比して市街を往來する人影手に取が如く見ゆ、

又港灣に添ひて黄金山白玉山等は巖然として主人
 の死を守るが如く、波上の涼船傾きて煤烟を揚げ
 つゝあるは主人の死屍に焼香するの觀あり、又港
 口及灣内には敵艦の傾斜したる者我閉塞船の沈没
 したるものあり、而して前線の高地には露兵此處
 彼處に駐屯し恨めしげに我軍を展望するが如く、
 余は身は既に旅順口内に入れる心地せられぬ、

萬綠叢中紅一點

露將會見の申込 時に露兵四五名赤十字章を附し
 たるもの來り、前方に將校ありて會見したしと申
 込めり、依て余等は桑田大尉及上田經理部長等と
 共に我前哨線に到るに、露兵約三四十名來り内に
 將校二名あり何事か物語らんとするが如し、余は
 茲に特筆大書して讀者諸君に報すべき一事あり、
 そは此會見が所謂萬綠叢中紅一點たる婦人の會見
 なりし事是なり、雖て一人の婦人左腕に赤十字章
 を附け現はれたり、其語る所に依れば、海軍士官

の妻にして未だ砲臺に登りたることなければ、東
 鷄冠山に登ることを許されたしと云ふに在りし、
 此時我經理部長は持參せる煙草を各露兵に分配し
 且酒を飲ましめ談笑の間に時間を費したるが、余
 は二人の將校に名刺を通じて其姓名を手帖に記さ
 んとを望みたるに、彼等は喜んで承諾したるが、一
 人は東部西比利亞狙撃歩兵第廿五聯隊陸軍豫備少
 尉ハフ氏と云ひ、一人は中尉にてイワノフ氏と云
 ふ、何れも服装美麗にして兵卒の見窄らしきに似
 ざりき、特にハフ氏は貴公子然たる風采を備へた
 り、又婦人は丈け高からざりしも眉目秀麗服装高
 尙にして年齢二十四五歳にもなるべく、名をヴィ
 クトリア、ホプリーヤと謂ひ、是れ又余が手帳
 に自ら氏名を書したり、此會談は彼我陣地の境界
 線よりしを以て余等は將校と握手の禮を交換し、
 旅順口内にて再會すべしとて別れ、婦人は三四の
 露兵に助けられて、砲臺に登り我數多の將卒の間

萬綠叢中紅一點、望臺の展望

に入り更に憶する所なく所々を觀望して歸りたる
 が、若し地を代へて日本婦人たらしめば如何、余
 等一同は該婦人の勇氣を嘆賞したりき、
 砲臺及びN砲臺 余等は更に舊圍壁を傳ひN砲臺
 (富士形砲臺)に登りたるに、是又大口徑砲二門据
 附けられたる儘我有に歸し、尙小口徑砲の散在せ
 るあり、而して舊圍壁は土囊を積み石にて壘み何
 れも堅牢なる銃眼を穿ち、其下には角材土囊等を
 以て堅牢なる兵舎を作りあり、而して砲臺背後に
 は四五間以上もある大道を通じて往復を便せり、
 余等は此道に出でたるに露兵は谷地を隔て、前線
 の山下に頭を出し、我方面を觀望せり、此道路の
 兩側には露兵の死体幾個もなく散在し、且つ手ど
 なく足どなく或は肉片腹腸一步一歩見るともなく
 眼に映じ實に慘憺たる光景なりき、

望臺の展望

鮮血淋漓たり 余等は更に望臺の背後に出で急

峻なる山腹を攀登したるに、此處彼處の石塊は血の雨を以て染められ、未だ鮮血淋漓たる邊に露兵の死体は手足所を異にして飛散せり、余は喘へぎながら踏むともなく此血汐に履を濡らして山上に達すれば、堅牢なる掩蓋を有する木材の兵舎二あり、一兵舎内には二個の露兵の死体ありし、又絶頂に甘珊以上の加農砲二門あり、砲門の臺下は大角材を以て構成せられありて、敵は退却の際石油を注ぎ火を點じたるを以て今尙盛に燃焼しつゝありし、此絶頂より四顧すれば旅順方面は東鷄冠山にて望みたる所と大差なく、更に北方には松樹山二龍山、盤龍山等眼下に在り、随つて我突擊陣地は指顧の中にありて、我軍苦戦の状を察せしむ、而して今や砲臺の全線には日章旗翩翩として我兵は雲霞の如く密集したる其壯觀は一種謂ふべからざる快感ありて、砲撃爆發の壯快とは自ら趣きを異にし、思はず壯絶快絶を叫ばしむるに至りぬ、

北砲臺に入る 是より望臺の正面を降りて東鷄冠山北砲臺の背後に出でたるに、大なる溜池ありて水を貯へあり其傍を過ぎ北砲臺に入る、背後の外壕深さ三十尺以上もあるべし皆巖石を破碎して開鑿したるもの、余等は新に架せられたる假橋によりて之を渡り、内部に入りて再び外壕より南方に出で所謂化物屋敷と稱名されたる、掩蓋部の圍壁を過ぎ、吉永(砲臺)砲臺に登りて慘憺たる跡を吊ひ、午後四時左縦隊司令部に歸り祝宴會に列せり、去五月廿七日南山攻略後八箇月を経過し、多大の犠牲を供したる旅順要塞も、遂に全く陥落したり、誰か大日本帝國の爲め萬歳を三唱せざるものあらむや、

第三 旅順の開城

軍使の會見

開城申込の書狀 時は維れ明治三十八年の爾かも一月元旦に於て、敵の難攻不落と誇稱せし旅順要塞其守を失ひて白旗を掲ぐるに至る、此日我攻圍軍は破竹の勢を以て、敵の要塞攻撃に従事し左縱隊に於ける望臺攻撃は最も猛烈を極めたる午後三時、忽然旅順口より白旗を掲げたる軍使水師營街道に前進し來り、我前哨線に達してステッセル將軍の書簡を我乃木將軍に贈り來る、其書簡の主旨に曰く、
我は全力を注いで日本軍を防禦して今日に至れり、最早や此以上抵抗するは徒らに死傷者を多大ならしむるのみなれば、爰に旅順開城の件に付協議を遂げんと欲す、貴官に於て承諾するならば、開城條件を具し全權委員を派遣せられ

旅順の開城、軍使の會見

んことを望む、

我攻圍軍に於ては素より異議なし、翌日午前七時山岡參謀をして返事を持參せしめ、水師營附近の街道に於て其書狀を渡したり、其要旨に曰く、
攻圍軍は貴官の申出を了承す、依て參謀長伊知地幸介を全權委員として商議せしむ、貴軍に於ては全權委員を派出し、本日正午十二時を以て茲に會合せん、
開城規約の協約 是に於て兩軍全權委員を派遣するごととなり、我が全權委員は伊知地少將にして山岡、津野田兩參謀、岩村海軍中佐、有賀法學博士、河津通譯委員として之れに屬す、露の全權委員はリース少將にして委員七名之れに屬す、中に衛生部長バランシヨフあり、我が委員は正午を以て會場に到り、彼れの委員は午後一時を以て此

軍使の會見

所に來る、會見は一時二十分を以て始まり、委任狀の交換あり、委員の紹介ありて後、開城規約及附屬書類は我が委員長より提出せられ、且つ閱覽の爲めに四十分乃至一時間の猶豫を與ふ、レ

ース少將乃ち席を離れんとし、
「余は念の爲めに問はん、此規約は絶對的に修正を許さざるものなりや否やを」

と我が委員長に問ふ、委員長は言下に

「修正を許すと否とは別問題なり、若し意見あらば參考の爲めに承はらん」

と答ふ、レース少將旨を領して退く、時に午後一時三十分、

待つこと約一時間、二時三十五分に至りて彼我の委員再び會見す、レース少將先づ口を開きて要求す、

「委員長閣下、余は此規約に就て閣下に要求し併せて言明せんと欲するものなり、

我が委員長は之れに答へて、

「貴意の趣即答しがたし、當さに熟議して後ち答ふべし」

と答へて退席す、時に午後三時七分、

三時三十五分に至り、我が回答を示すべく三たび會見せらる、我が委員長は、

「貴意に對して此に答辯せんとす、

一、全部解放を承諾するを得ず、規約の通り將校、義勇兵及び官吏にして筆記宣誓するものに限り歸還を許す、

二、宣誓に對し皇帝陛下の裁可を受けらるゝ事、英文にて認めらるれば希望の如く傳達すべし、

三、乗馬の携行は之れを許さず、

四、從卒一名の同行は之れを許す、

答へて茲に至れるとき、鈴音チリ、ン〜と鳴、是れ我軍司令部より電話の通せるなりき、曰く「

軍使の會見

百九十二

一、陸海軍人及び義勇兵並に所屬官吏は全部本國へ歸還せしめられたし、

二、開城規約中に示せる宣誓なるものは我が露國に其例なし、故に皇帝陛下の裁可を得るにあらすんば宣誓するを得ず、望むらくは皇帝陛下に電奏するの便宜を與へられん事を、

三、要塞内の兵は殆んど全部傷病兵なり、

四、軍旗は燒棄して一旒も存せず、

五、將校には其乘馬携行を許されたし、

六、從卒一人の同行を許されたし、

七、軍艦は燒棄若くは破壊して一隻も現存せず、

八、皇帝陛下より宣誓を許されて歸還するを得ば荷物は何程まで携帶するを得べきや、

九、赤十字社の建物土地及び其内部に在るものは沒收せられざることを望む、

十、日本の俘虜は如何に處分すべきか、此十ヶ條に關して閣下の同意を得及び了承を乞ひたし、

するもの續々あり、開城規約締結の談判中此の如き事あるは彼我の紀律を亂す、宜しく其旨を露軍司令官に申入るべし」と、我が委員長直に其旨をレース少將に傳へ、少將乃ち一書を認め騎兵をして之れをステッセル將軍に致さしむ、我が委員長答辯を續行す、

五、將校の荷物は日本將校同様の分量を携行するを許す、其他は家族又は他に預け置かるべし、此時露の委員卒然として問ふて曰く「家族は如何すべきか」と我が委員答へて曰く「同行すると否とは各自の隨意なり、家族に對しては我軍充分の保護を與ふべし」と更に最初の答辯を續く、

六、赤十字社に對する希望は申出での如くに取計ふべし、

七、俘虜の日本軍人は直に引取るべし、

貴問に對する我が委員の答辯此の如し幸ひに丁せられよ、

百九十三

我が委員長は右の如く逐次簡明の答辯を與へ、且つ質問すらく、

「旅順に在る傷病兵は凡そ幾名ぞ」

露の委員は答ふ
「約二万人」

此時露の衛生部長ハラシヨフは乞へり

「病院には最早や藥品もなく、綱帯もなし、惨たる光景を見るに忍ず、願くば一刻も早く是等の諸品を給與せられんことを」

我が委員之れを傾し、彼我委員間に於ける開城規約の談判は是れにて終れり、是に於てか彼我委員は直に休戦すべき旨を各々其司令官に申告す、時に午後四時三十五分なりき、

彼我委員は各々別席に退き、開城規約を英文に清書し、以て双方の調印を終る、是れを午後九時四十五分とす、
是より先き午後七時、露の委員は皇帝に電奏すべ

き官警裁可の申請書を提供せるを以て、我が委員は直に打電の手續を了す、
午後十時諸般の事全くと了す、彼我委員乃ち一室に會食す、各々赤誠を吐露して毫も城府を設けず、歡語快談、復た敵手たりしを忘るゝものゝ如し、
露の委員は旅順降伏の原因に就て語れり、
「旅順の開城實に已むを得ざるものあり、傷病者多くして其處置に困難したることは是れ一、彈藥糧食の缺乏したることは是れ二、要塞本防禦線たる東鷄冠山北砲臺、二龍山、松樹山、望臺等を攻略せられたる以上、旅順は復た五日間を支ふる能はず、是れ三なり、此三原因あり、何ぞ開城せざるを得んや」
彼れに於ては然らん、爾かも我が日本軍人にして此間に處せんか、尙ほ「已むを得ず」として已まざるべきなり、實は十一時過を以て徹せられ、旅順の乾坤復た晴雲の影なきを覺ゆ、

我參謀とス將軍

攻圍軍の津野田參謀は乃木司令官の命を帯びてステッセル將軍と會見せること前後二回、其光景記して以て世に傳ふるに足る乞ふ之を左に叙せん、
第一回の訪問 開城約成りて慘憺たる旅順の天地再び平和に復す、乃木司令官特に津野田參謀をステッセル將軍の邸に遣はし、以て至仁なる我が天皇陛下の聖旨を傳達せしむ、
時維れ一月三日、津野田參謀往きて將軍を白玉山下の邸に訪ふ、將軍欣然として之れを一室に延見す、參謀一揖して曰く
「余は此に司令官の意思を傳達するの光榮を有す旅順開城の事叙聞に達するや、我が 天皇陛下特に參謀總長をして聖旨を司令官に傳へさせ給ふ、曰く

陛下將官ステッセルが祖國の爲めに盡せし苦節を遊みし給ひ、武士の名譽を保たしむべき

我參謀とス將軍

とを望ませらる、
聖旨此の如し、余乃ち司令官の命に依りて之を閣下に傳へんが爲めに來れり、
將軍之れを聞きて恐悚に堪ざるものゝ如く、肅然起つて襟を正して言へり、
「ア、敵國の皇帝陛下より此の優渥の聖旨を辱す、余の光榮何物か之れに加へん、余は唯恐懼の至りに堪へず」
述べて此に至りて感慨に堪ざるものゝ如し、既にして又曰く
「余は此機を利用し、乃木司令官閣下と會見せんことを欲す、其場所と時日とは一に閣下の指定に任す」
參謀乃ち辭し歸り之れを乃木將軍に復命す、
第二回の訪問 是に於て翌四日乃木司令官は津野田參謀及び川上外務書記官をステッセル將軍の邸に遣はし、會見の場所と時日とを報じ、且つ贈る

に雞三十羽、三鞭酒一ダース、干葡萄酒若干を以てせしむ、參謀は將軍と相對し互に赤誠を披瀝して談ずると數刻、話緒混々として盡さず、

參「我が司令官は明五日午前十一時水師營に於て閣下と會見せんとを望まると、且つ司令官は閣下の家族に對しては充分に便宜を與へらるべし、閣下幸ひに意を安んぜられよ」

將「乃木閣下の厚意感謝に堪へず、事此に至る、宜しく胸襟を披瀝して談ずべし、是れ男兒の事にわらずや」

將軍語て此に至り談は一轉して戰爭のこに入る、果然先づ胸襟を開けり、

將「シロバトキン將軍今何れに在りや」

參「奉天附近の塔山に居らるゝならん」

將「余は十月六日附のシロバトキン將軍の書簡を受取り、是れ實に最後の書簡なりし、其書に曰く余は今後攻勢を執つて旅順の包圍を解くべし、」

し、乞ふ今暫らく忍んで守備せよと、爾後支那間諜の言に據ればシロバトキン將軍は或は金州に來れりと曰ひ、或は營城子に來れりと曰ふ、爾かも余は之れを信せざりき、

參「シロバトキン將軍の攻勢を執るは事實なり、十月十日我が大山軍と大會戰を爲せるも、兵五六万を失ひて退却し、今尙は沙河を挾んで對陣しつゝあり、

旅順の交通杜絶せる、是等の事も亦た知り得ざりしものゝ如し、ステツセル將軍は更に心に懸るものあり、海上の救援是れなり、

將「シテ、バルチック艦隊は今何處まで來れる、」

參「其本隊は未だ喜望峯に達せじ、」

望峰の彼方に在り聞き、争かでか撫然たらざるを得ん、是に至りて津野田參謀は問を起せり、

參「閣下、要塞守備中何物にか最も困難せられし、」

將「困難とや、其は二十八榴榴砲の威力なり、要塞防禦の破壊されしも是れぞ、旅順開城の時來りしも是れぞ、」

と先づ深く此巨砲の効力を賞し、

將「此の旅順要塞は本とサワロフの青泥窪經營の際、コンドラチエニコ將軍の經畫せる所、余は之れに與からず、青泥窪と旅順との間に鐵道を設けて交通の便を計れるもの、是れ抑も貴軍をして容易に廿八榴砲を送を得せしめたる所以、旅順は夫が爲に陥落するには至れるなり、」

交通と軍事と利害相伴はざる洵に此の如きか、將軍は更に語調を強めて言へり、

將「余は日露戰爭には反對なりき、余は北清事變

に際し第三師團を率ゐて北京に進めり、當時福島將軍にも逢へり、山口將軍とも語れり、貴下、連合軍中最も勇敢なりしは實に貴軍と露軍となり、貴軍の編成完全なるは余の感嘆せる所なり、世にはアレキシーフ將軍を以て主戰論者なりとせり、然れども之れ誤まれり、將軍は北清事變の際總軍司令官として天津まで進めり、余と同居るの理あらんや、」

最後の一句最も力あり、ア、アレキシーフ果して非戰論者なりしか、

參「願はくは我兵の高評を聞くを得ん、」

將「日本軍人の批評とや、日本軍人は勇敢なる軍人なり、工兵の忍耐なる、砲兵の練熟なる、共に感嘆の外ならず、初めは砲兵の照準正確にはあらずりき、爾かも逐次其練熟するや盡く我が主要の地點に命中するに至れり、余は斷言す今

司令官の會見

回の開戦は實に露國が日本兵の眞價を知らざるに原由すること、

將軍は更に其談話を進めたり、

「余は五年以前に旅順に來り、其兵舎の整理をなしつゝありし、早く其業を終へて北進するの意なりしも、事意の如くに進まず、終に第四、第七兩師團を率ゐて此要塞を守備するの任を負へり、貴下、日本軍第一回夜襲の時は、余は實に狼狽し、且つ恐怖せり、當時背面の防禦未だ成らず、守備の兵數亦た二三千に満たず陸上の計畫皆半途に在りしなり、而して其築城計畫をなせるは實にコンドラチエンコ將軍なりし、惜いかな北砲臺攻撃の時將軍亦た其中に在り、二十八珊瑚砲彈の爲めに多數の兵卒と共に無慘の最後を遂げしなり、」

將軍は話次一轉、自己の身の上話に及べり、

「貴下、余は三たび戦闘に従事して三たび負傷

百九十八

せり、第一回は露土戦争、第二回は北清事變にして、第三回は此日露戦争なりとす、余は信ず余が國家に對するの義務は既に充分に盡したることを、願くは余の國に歸らん日、田舎に閑居して静かに餘生を送らんことを、」

閣下、閣下とクロバトキン將軍との交誼如何」

將「クロバトキン將軍なるか、彼れは幼年學校時代よりの同窓の友たり、露土戦争に際しては共に參謀大尉として盡す所ありき、彼れは實に余が親友なり、」

津野田參謀とステッセル將軍と妮々談話を交換しつゝある間に、川上外務書記官はステッセル夫人と會談す、既にして用務終り乃ち共に辭し歸る、斯くして乃木將軍とステッセル將軍との會見は行はれし也、

司令官の會見

會見の日時 旅順開城規約成立後、日露兩軍司令

官は第一回の會合を五日午前十二時水師營の西方なる一民家に於てなしたり、前日來彼我の受渡委員は東西に奔走して繁忙を極め居りたる折柄なれば、我軍に於ては會合の諸準備十分ならず、渡邊監理部長は時間前に會場の掃除をなし響應の手當をなしたつゝありしに、ステッセル中將は十一時十分前參謀長リース大佐以下副官二名傳騎五六名と共に威儀嚴肅に來會せり、ス將軍は丈高からずして身体肥滿し鼻下に鬚を蓄へ、温乎たる顔容は慄悍豪放なる露軍の指揮官として不釣合の感ありしも、亦一種習すべからざる品格ありて、確かに將帥たるの器に於て缺くる所なきが如し、我が乃木將軍の瘦軀なるを相對し、或人は山縣大將と大山大將とに於けるが如しと謂ひしも理はりなり、斯くて我乃木將軍は伊知地參謀長、安原參謀、津野田副官を隨へて會場に到着したるは、十一時四十分頃なりき、

司令官の會見

百九十九

會見の光景 會場は興行二間に間口三間位なる見窄らしき民家にて、其真中に一個の卓子を置き前面に乃木將軍とス將軍と相并び、ス將軍の側にリース參謀長乃木將軍の側に伊知地參謀長列席し、之れに相對して各其副官列席し、卓子の主人公は我監理部長渡邊砲兵大佐なり、元來今回の會見は兩司令官が職務上公けの會合にわらず、唯一個人として互に私情を温めたる次第なれば、一の會食談話の如きものなりしを以て、差したる談話もなく又他人をして此會合に交へざりしを以て、談話の要領をも知るを得ざるが、兩將軍の間には絶問なく談話を交換され、川上外務省參事官は兩將軍の間にありて通辨の勞を執りたり、ス將軍は誠實赤心を以て迎へ日本軍人の勇悍機敏將卒相一致して戰鬥に従事し國家の爲め 陛下の爲め生命を犠牲に供するを名譽とするの精神を稱揚したるに對し、乃木將軍は其の贊辭は余が感謝する所なり、

入城式と弔魂式、旅順入城式

余は老運幸にして病魔に冒されず戦傷を蒙らざれども、余に二子あり一子は疊に南山に於て戦死し又一子は二百三高地の劇戦に於て戦歿したるは、聊か陛下に對し奉りて奉公の誠を致したるを喜ぶものなり、などの談話さありたりと、此時に於ける兩將軍の感慨果して如何なりしぞ、斯くて一同撮影をなし會談は是れにて全く終を告たり、時に午後一時三十分頃なりと、以上の如く委員の會合同官の會見等ありて、旅

順開城は滞りなく結了し、彼我委員に依りて物件の授受は行はれ、健全者は俘虜とし又は歸國し、負傷者は病院にて治療なし、其他諸般の事は我國の經營に歸し、新たに諸官は設備され、我攻圍軍は月末を以て更に北進して奉天の大會戦に參與したり、余は茲に旅順戦史の終りを告ぐるに望み、攻圍軍が名残りの式典たる入城式と弔魂式の光榮を叙述すべし、

第四 入城式と弔魂式

旅順入城式

我が旅順攻圍軍は正々堂々隊伍を整へて明治三十八年一月十三日旅順口内に入り入城式を行ひたり實に此十三日は我國開國以來特筆大書すべき紀念日の一なるは論なく、又世界の歴史に永久記憶される可き一大紀念日となれり、此日空は一點の曇な

きまで晴渡り風靜かに日温く、自然も此日を祝ひてか港内波動かず、今まで砲聲に驚き騒ぎし海鷗の鏡の如くなき渡れる水の面に我物頭に浮ひ泳げるも、いと楽しく見受けられぬ、此日入城式に列する各部隊は定刻迄に城外に整列して司令官の來着を待受けたり、午前十時軍樂隊

は進軍の譜勇ましく足並揃へて水師營街道より前進す、乃木大將は白のマボンに長靴を穿ちカーキ色の外套を着し、太く逞ましき駿馬に跨り威風堂々として旅順の市内に進み、伊知地參謀長其他の幕僚之に續き、各兵種の一つ中隊づゝにて編制せられし各師團は師團長指揮の下に隊伍肅々として進入せり、旅順舊街の入口には一隊の支那人各自に「順民」と記せし日の丸の小旗を携へ、「歡喜奉迎軍隊」「大日本帝國萬歲」「大日本國旅順市民」など筆太に記るせし數旗の大旗を押立て、列を造りて我軍隊の入城を歡迎せるも殊勝なり、露國人の男女も多く此盛式を見んとて集り來りしを、今まで其鼻息を窺ひし支那人も虎の威を借る狐の如く立ち退けくど手をふりて押しやれば、露民は一同苦笑しながら支那人の命令に服するも可笑かり

過ぎ、鐵道線路に沿ふて海岸に出で新市街に到り公園附近の廣場に達すれば、乃木司令官及其幕僚は路傍の廣地に列を正し、乃木大將は數歩馬を進めて前方に止まり、幕僚は後方に整列し、北白川宮殿下を始めとし外國從軍武官も其の左方に整列せり、軍樂隊は道をばさみて軍司令官に相對し、歩兵の通過する毎に進軍の譜を吹奏す、嗚呼此盛式は傍看せる余等(編者)の感激は筆紙に盡し得る所に非ず、兵士の服装は寧ろ塵芥に汚て美々しき盛裝あるにわらず、將校士卒も鬚長く延びて色黒く戰鬪勞苦の面影残りて、婦女女子の歡心を買得る愛嬌のあるにわらず、然れども世界無比の要塞を陥落せしめし最光榮ある勝利者たる軍隊なるを思へば、深厚なる敬意を以て其進行を迎ふると共に、其勞苦其功績に對し感謝の念を禁じ能はず、或る外國通信員の如きは旅順に居残りし獨逸商人に向ひて、進行せる歩兵を指さしつゝ

入城式と弔魂式

「見よ旅順を陥落せしめし勇敢なる軍人を、彼等こそ露兵を粉砕せるものなれ」と得意に語り合ふものありき、

軍隊は軍司令官の前を通過する毎に、將官に對する敬禮を行ひ一時卅分間にて全列の通過を終へ、軍司令官は直ちに司令部に歸還されたり、

水師營の弔魂式

旅順開城式の翌日即ち一月十四日を以て戦死者の弔魂祭を行はる、此日早曉霜降り掛りて枯木花を開き、満山雪かど欺かるるばかり白皚々たる有様にて九時過ぐる頃までも太陽薄雲の爲めに鎖され何となく悽愴の觀を呈し、晏天亦た今日の弔魂祭に同情の涙を垂れたるが如くなりき、

式場は水師營東北隅なる小高き廣漠なる高粱畠に此處は東は大孤山、望臺より二龍山、松樹山を経て西の方二〇三高地までも展望し得られる好地點、式場の中央には「第三軍戦死病歿各位之靈」と書し

たる木標を樹て、供物を備へ、正面に松樹を植へて柳にかへたり、時刻到り軍樂隊は「國の鎮の一曲を奏するや、司令官乃木大將は靈前に進み招魂の辭を朗讀せらる其文左の如し、

(因に朗讀中余が筆記したるものなれば文字及意義の少しく錯誤したる所なきを保せず)

時維明治卅八年一月十四日、第三軍司令官乃木希典等肅て清酌庶羞の奠を以て、我第三軍殉難將卒諸氏の靈を祭る、爰に我軍關東半島に上陸せし以來、實に二百十有餘日、其間諸氏は能く勇往し能く健闘し、或は鋒鏑砲火の下に命を致し、或は風慘雨虐の間に病没せしもの少なしとせず、而かも其効業遂に空しからず、茲に旅順口港内敵艦隊は全滅に歸し敵要塞は陥落し將卒の降伏を見るに至りしもの、誠に諸氏の遺烈に依る、希典等諸氏と生死を共にし而かも生きて大元帥陛下より優渥なる勅語を下賜せらる

に遭ひ、顧みて諸氏が遺烈を思はば豈獨り自ら光榮を受けるに忍んや、噫諸氏と此光榮を配んとして幽冥相隔つ、悲哉、即ち我軍の旅順に入るや、諸氏が忠血を以て染めたる山川と要塞とを下瞰する所を相し、先地を清め壇を設けて諸氏が英魂を招く、尙ほ魂や彷彿として來り饗けよ、

音吐朗々讀み了つて愁然たるもの少時、將軍靈前を去るや、北白川宮恒久親王殿下進んで御禮拜あり、次に各師團長、旅團長、聯隊長等の禮拜あり、此の間僧侶二十餘名の讀經始まり戦死病歿者の父兄之れに續き、外國武官外國通信員の禮拜を終りて、各隊代表者の參拜あり、此式場に列したる各軍隊は遠く四方を取圍み見渡したる所、方一里に亘れるが如し、今茲に祭られたる諸氏の血と肉とに依つて賸はれたる旅順口は永く諸氏の靈魂に依つて保護せられて、靈前に樹へられたる松は特な

入城式と弔魂式

らぬ霜の花を咲かせて招魂の好き供物となり、自然も亦た諸氏の忠烈に感じたるかを覺ゆしむ、諸氏は死して世界無上古今未曾有の要塞を陥落せしめたるものなれば、生者に優さるの餘光ありと謂ふべく、余等戦列外にあるもの此の盛典に列するを得たるは實に光榮とする所なり、祭典終りたる頃は満天晴れ亘りて一點の浮雲なく寒威も亦頗に減じたりき、是より設けられたる宴會席場に入りたるに、約一千坪をアンペラにて取巻き其中に臨時テールは設けられ、將校及同等の待遇を受けつゝあるもの約二千人を會せらる、其盛會は謂はん方なき有様にて、折詰は豫て恤兵部より寄贈されしプリキ製の菓子入の明箱を集めて利用し、各二個宛一は赤飯一は肴を入れ外に密柑、饅頭、カステラ等もあり下戸にも上戸にも適するやうに用意せられ、陣中に於ての此の献立としては實に善美を盡せり、酒將に初まらんとするや、樂隊は

入城式四用魂式

一 隅にあつて君ヶ代の曲を奏す、一同敬禮をなし
終るや、乃木大將の發聲にて 天皇陛下万歳を三
唱し、次に大迫中將の發聲にて乃木大將の万歳を

二百四

三唱し、満場破るゝ計りの歡聲の間に酒酣どな
り、餘興には煙火、舞踏、仁和加、軍談等あり、
一同歡を盡して散會したるは午後二時過なりき、

旅順要塞戰史畢

附
錄

「附録」

第三師管臨時國民歩兵第二大隊 旅順警備録

第一、大隊の編成と出發

第二師管臨時國民歩兵第二大隊は、明治三十八年一月二十日勅令下り、歩兵第十八聯隊補充大隊内にて編成することとなり、補充大隊に於ては編成委員を左の如く任命したり、

- 委員長 陸軍歩兵少佐 鹿取彦猪
- 委員 陸軍歩兵大尉 村山鐵男
- 全 陸軍歩兵中尉 竹内元三郎
- 全 陸軍二等軍醫 石黒三千雄
- 全 陸軍三等主計 渡邊 潔
- 委員は、國民兵の召集編成に晝夜兼行して事務に執掌し、二月四日に至り大隊の編成を完結したり、
- 大隊以下各將校の氏名左の如し、
- 臨時國民歩兵第二大隊長少佐 森川 昇
- 全副官 少 尉 長谷川兵藏
- 軍 醫 三等軍醫 中野弘三

附 録

軍醫代用	主計	第一中隊長	第二中隊長	第三中隊長	第四中隊長	以上
二等看護長	二等主計	大尉	中尉	少尉	中尉	少尉
石部吉次郎	大戸直則	栗原賢雄	漆畑毅郎	今村房吉	佐藤勇太郎	大森嘉六
今井信夫	栗田量平	吉田忠亮	笹山信風	上野勝吉	藤田倉藏	今井三太郎
武田久	原 久	新村喜和	新村喜和	新村喜和	新村喜和	新村喜和

一

りたるが、我大隊は何れの方面に向ふべきや、判然せざりき、

二月五日正午を以て右將校の引率する數百名の兵員は、愈豊橋停車場を出發することとなりぬ、國民兵は常備軍とは異なりて何れも一家の柱石のみなれば、妻子眷族の見送り人多く、停車場の雑踏は常備軍の出發の時にも勝る盛況なりき、六日午後十一時五十一分廣島停車場に到着、宿舎に入り、一日滞在、八日午後二時過ぎ宇品港より吉林丸に乗込み、三時三十分出帆し數晝夜の航海中朝鮮濟州島附近航行の際、二月十一日の紀元節の佳良に際し、船中にて祝賀を表し、十三日午前九時三十分大連灣内に入りて、柳樹屯に寄港して物件人馬の揚陸をなし、我大隊は大連港に向ひ午後三時到着、直ちに揚陸を開始し、全五時終りを告げ、愈々旅順警備に任することとなり、翌十四日十五日二回に大連發着車に乗し旅順口に向ひ、

乃木町兵站部宿舎に入り宿營したり、

第二、旅順の警備

二月十七日要塞命令により、後備歩兵第一旅團と交代して、我大隊は、後備歩兵第五十聯隊及國民歩兵第一大隊旅順要塞砲兵聯隊等と共に、旅順の守備に任することとなり、大隊の受持區域は左の如く定められぬ、

新市街より北大陽溝を経て、石板橋に通ずる道路以西の第三區及第二區の警戒監視、斯くて十八日各中隊は各其警備地に入り、大隊本部は楊樹溝東方官舎に移りたり、翌十九日大隊長は警戒監視、志氣、振地、敬禮、衛兵勤務等に就き懇篤なる訓示を與へ、且つ勅使下向に就き左の訓示をなす、

出征軍隊慰問の勅使、來る廿四日當地に御下向の達ありたり、我隊若任後日未だ淺く、而して此皇恩に浴す何等の光榮か之れに如かん、眞に千歳一遇の恩典豈深く感銘せざるべけんや、宜

しく上下一致職務に勉勵し、誠意誠忠我臨時國民歩兵第二大隊の名譽を保有し、天恩に報ひ奉らんことを期せよ、豫め茲に之を告示す、

第三、各中隊の警備區域

二十日各中隊の警備勤務歩哨區域を左の如く定む
第一中隊 鴨湖嘴砲臺、西大陽溝砲臺、新砲臺、新砲臺東麓道路、第二低砲臺、田家屯露病院、鐵條網監視、
第二中隊 潘家溝及八号砲臺、白嵐子海岸監視、七号砲臺、王家屯、中間砲臺、第一低砲臺、
第三中隊 老鐵山北砲臺、全南砲臺、全燈臺方面諸砲臺、白嵐子砲臺、
第四中隊 鳩灣街道、西大陽溝兵舎南方高地、鴨湖嘴街道、西大陽溝南砲臺、羊皮山砲臺、西大陽溝北砲臺、西大陽溝兵舎北方高地、
其外通信所、陣具家具整理、捕虜收容所、糧餉部本倉庫等の警備に任じたり、

三月一日、滿州軍活動間鐵道守備の爲め、後備歩兵第五十聯隊の各大隊より二中隊宛北進することとなり、國民歩兵第一大隊より各一中隊を出し、當分の内其後の守備に任すべきことを命せら

れ、翌二日我大隊にては第一中隊を舊市街に派遣し、後備歩兵第五十聯隊龜岡大佐の指揮を受けしめ、同中隊の哨所を第四第二中隊にて交代して警戒したり、翌二日從前の地區を改めて左の如く定めらる、
從來の第一區第二區を合して第一地區、第三區、第七區を合して第二地區、第四、第六區を合して第三地區、第五區を第四地區となす、
而て翌三日大隊の二個中隊(第二第三は)第一地區守備隊長(砲兵第二大隊)弦木少佐の指揮下に入り大隊本部并に二中隊(第一第四)は第三地區守備隊長(後備歩兵第五十聯隊)龜岡大佐の指揮下に入りたるが、是れと同時に、爾今國民歩兵第二大隊(二中隊欠)は要塞司令官の直屬となり、第三地區左翼の守備并に其他域内に在る諸建物の監視に任じたり、其區域左の如し、
松樹山白銀山諸砲臺并に新市街旅順鐵道より舊市街に通ずる道路以北及舊市街より水師營に通ずる道路を限る、其他水師營國家房の掩蓋監視、

水師營倉庫の監視、越へて廿四日に至り一時竹内少將の指揮下に入り鐵道守備に任せられたる後備歩兵第五十聯隊の四個中隊歸還したるを以て、其守備地を警戒しありたる我大隊本部并に二中隊は要塞司令部の總豫備隊となり、

斯くて各中隊の守備區域及び其宿舎も確定したるが、大隊本部及第一第四中隊の宿舎地は、舊市街東港の東白銀山に至る傾斜坂の兩側に築造したる露國官舎及兵營にて、地質高燥井水又清淨にて申分なく、第二中隊は西港の西岸文家屯に在り第三中隊は第二中隊の南方約千八百米突に在り、共に住民地を距る丘谷に築造されたる露國兵舎及哨所にて永久的兵舎としては、構造不備なるも、衛生上には最も適當の地なりき、

第四、怪しき射撃と地雷爆發

旅順守備の任にある大隊に、震天動地の活動のあ

るべき筈なく、又奇聞逸話等の生ずべき理由なき事なるが、茲に怪しき射撃と地雷爆發の二珍事こそ起りたれ、時は四月廿八日塩廠を去る東北約一里の村落の住民より、要塞司令官に訴へ出たる所によれば、同村落附近に於て近來銃器を携へたる不良の徒出沒して安眠するを得ずと、依つて司令官より我大隊に將校斥候を出して偵察すべき事を命ぜられたるを以て、翌廿九日今村及新村の二特務曹長に下士以下十名を引率せしめ、鮑魚肚子及龍王島方向に派遣して情況偵察をなさしめたるが、更に怪しき者の徘徊するの様子なし、土人の謂ふ所によれば何者か數夜二三十人位にて小銃を發射して村民を脅威せしも、金品の掠奪せられたるものは一もなしとの事にて、不得要領に此事件は終りを告げ、其後何等の訴願もなかりき、次に地雷爆發事件のありたるは、七月四日にて、當日第十二師團後備工兵第一中隊附陸軍工兵特務

曹長拜田長八が、楊樹溝附近に地雷搜索除去の爲め、我大隊の伍長鈴木榮藏外六名を指揮し、午前十時頃より楊樹溝西方高地附近を搜索中、午後六時四十分頃踏落地雷爆發の爲め、伍長鈴木榮藏上等兵片岡音作一等卒中田長太郎は負傷し、鈴木片岡二人は數日後死去したり、職務の爲めとは謂へ悼惜の至りと云ふべし、

第五、整理と衛生

旅順警備隊と云ふものゝ敵前と謂ふにわらず、殆んど内地要塞と同一の情況にあるものなれば、警備隊の重なる任務は戦後の旅順要塞を整理し、不潔物の除却をなすにありたる者にて、整理に就は種々諸官の任命ありたれども、我大隊が整理の一として實行したるは、八月廿一日士民の家宅を搜索して軍需品を押収したることなり、即ち第一中隊は李家屯より大孤山前小孤山後徐家屯殷家屯郭家溝に亘る諸部落、第四中隊は趙家溝(北支那町)

塩廠及南北大板嘴の諸部隊を搜索して、露國小銃十挺三十年式銃二十二挺方匙圓匙十字鉞等數多あり大に土民を懲戒したり、又要塞地帯に植林をなすこととなり、苗木は露人の培養したる松、柏、アカシヤ等を以て五十町歩に各部隊記念造林を作る爲め、一個大隊より毎日四十人宛を出し、廿日間に完了する計畫をなし、八月十二日より之れが實行をなしたり、衛生上に就ては最も注意したる所にて着隊早々三月四日大尉大戸直則軍醫中野弘之特務曹長新村喜和二郎を清潔委員となし、鋭意清潔法を施行したる結果、非常の好成績なりき、當時脚氣の爲め他隊には、多數の患者ありしも、我大隊にては四月十六日の調査にては一名の入院者四五名の輕傷者ありたるのみ、又約七週間に入院患者は十七名のみ此内三分の一は豫て常備軍にありて病氣の爲め免役となりたるものなり、其他傳染病に就ては一層

の注意をなしたる結果は衛生上總て他隊に勝るの成績なりき、

第六、平和克復と凱旋

九月十四日に休戦條約の通報に接し、十月六日復員事務の打合をなし、十月十七日露韓和條約御批准の通報あり、十月十八日要塞司令官より大隊は他の諸隊と共に不日内地に凱旋すべき等の命令を受け、且其守備地區を歩兵第六十四聯隊に譲り廿一日交代すべきことを命ぜらる、翌十九日大隊長は内地歸還に關し懇篤周到なる訓示を與ふ、十月廿九日平和克復の勅語奉讀式を施行し、併せて滿州軍總司令官の訓示を頒ちたり、十一月三日平和克復第一の祝賀會は、陸海軍合同にて施行せられ、盛大なる觀兵式を行ひたり、此日尾藤東宮武官より、左の皇太子殿下御詞の覺書を傳達さる、
當要塞占領以來諸般の困難を排して着々其經營

を實施し、能く防備の任に服せられたる司令官閣下始め將卒の忠誠に對し、
皇太子殿下深く御滿悦に思召され、時將に寒氣日を追ひ其威を増さんどす、既往長日月の間櫛風沐雨暑を冒し寒を凌ぎし、司令官閣下始め將卒の健康に就き軫念あらせられる、各自益愛護を加へ以て有終の功を全ふせられんことを望ませ給ふ、

斯くて愈十一月七日大連に向ひ出發凱旋することとなり、午後一時三十分海軍樂隊に送られて肅々停車場構内に入り、午後二時三分發車に乗し六時十分大連に着、九日午後二時第一第二第四中隊は福山丸、大隊本部及第三中隊は他の部隊と共に安藝丸に乗込み大連を出發し、安藝丸は十二日午前八時似島に着乗船者は一同檢疫を了り其の直に宇品に上陸して廣島に到り、福山丸乗船者は後れて午後三時檢疫をなし、同船に一泊し翌日宇品に上陸して廣島の宿舎に入り、十四日宮島に參詣して十五日午前と午後と二回に廣島驛を出發して豊

橋に向ひ、本部及第一第二中隊は十六日午後十一時十五分、第三第四中隊は十七日午前八時四十六分豊橋に到着し、熱誠なる歓迎を受け、越へて二

十日解隊せられて臨時國民歩兵第二大隊は支障なく其任務を終了したり、

明治三十九年三月七日印刷
明治三十九年三月十一日發行

定價 金參拾五錢

不許
複製

編纂者 三河國渥美郡豐橋町大字西八町壹番戶
藤波一哉

印刷者 名古屋市内屋敷町八番地
東崎作藏

印刷所 名古屋市天王崎町番外三十六
長谷川活版所

發行元

三河國渥美郡豐橋町中八町營門前
豐川堂

竹内商店

廣 告

一 弊舖は豊橋歩兵第十八聯隊御用書肆にして左の品々
營業罷在候間陸續御用向の程奉願上候早々

營業種目の概略

- 一新兵入營ニ關スル書籍一切 ○戰術及軍事學ニ關スル書籍一切
- 一衛生及會計ニ關スル書籍一切 ○參謀本部御發行の地圖各種
- 一凱旋みやげ除隊みやげ一切 ○祝詞、祝文、吊祭文いろいろ
- 一陸海軍人 除隊後無試験就職手續 ○在郷軍人心得書等

追て遠隔の處より御照會の節は早速御返事可致候御注文の節は總て前金の事郵券代用不苦候尤も壹圓以上は郵便、銀行等の爲替にて願上候

豊橋中八町營門前

陸軍御用書肆

豊川堂 竹内商店

廣 告

廣 告

名譽ある軍人諸士に告ぐ

戦勝
記念
獻額類

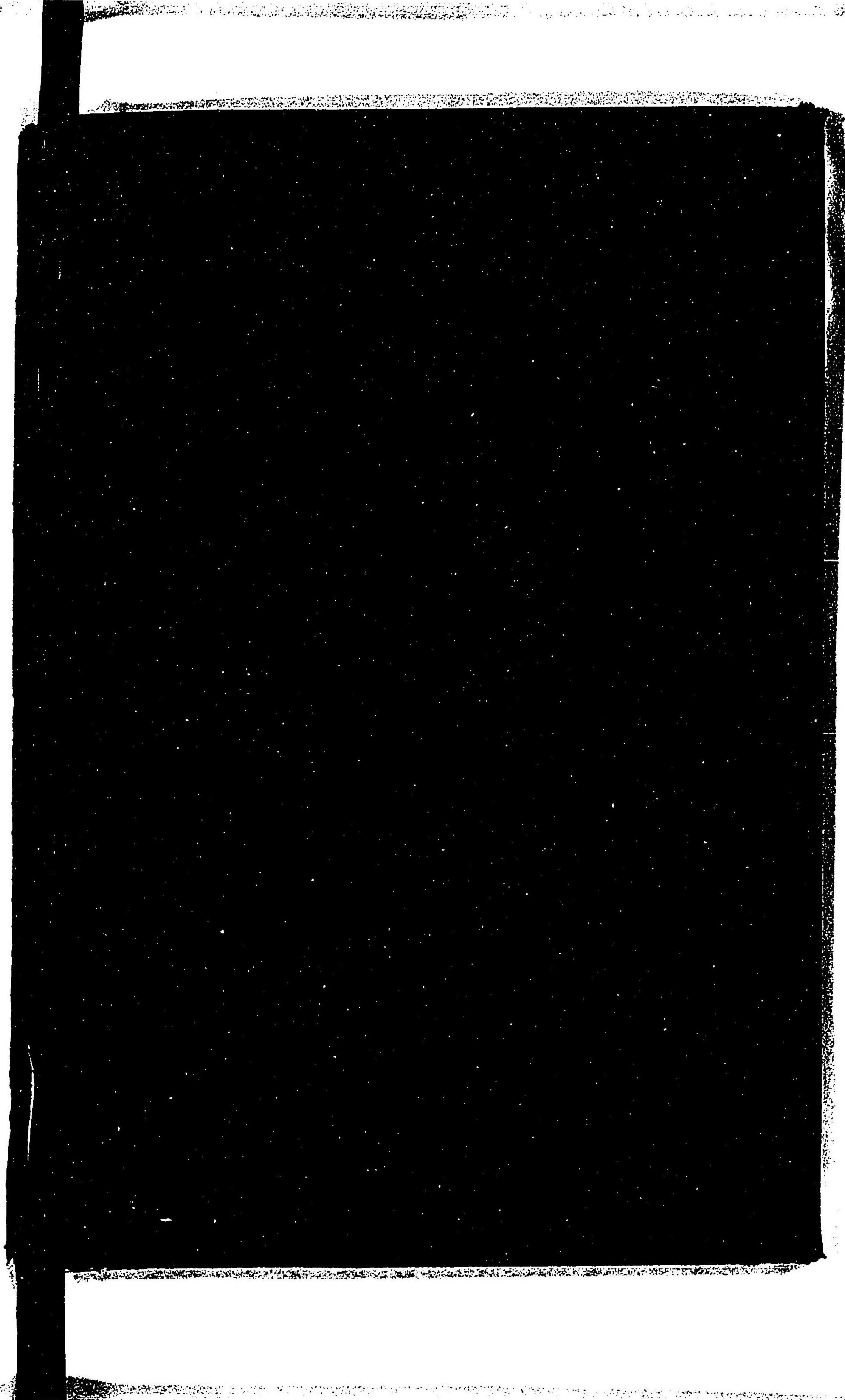
世界に類なき日露の大戦争に参加し連戦連勝以て名譽の凱旋をなしたる軍人諸君は須らく平素信仰する處の神社佛閣に獻額するの必要ありとす弊店は今回有名なる畫家を聘し額の製造に従事せり願くは續々御注文あらんとを

追て繪柄の義は御望みに應じ畫かしひ然して小は一枚五十錢より大は百圓迄位有之候猶團体等にて御献上の大額は特に割引御相談可致候

豊橋中八町營門前

豊川堂竹内商店

42
250



002975-000-7

42-250

旅順要塞戰史

藤波 一哉(無三居) / 編

M39

ACB-6569



